

はじめに

本報告書は2001年10月16日にスラブ研究センターで開催されたセミナーでの5人のパネラーによる研究報告とコメントを集めたものである。提出された5本の論稿を報告書にまとめるに当たって、論文2、研究動向紹介1、コメント1、補論1に区分し、全体に「日ソ戦争と戦後抑留の諸問題」のタイトルをつけた。

第二次大戦の最終局面におけるソ連の対日参戦は、戦後の東北アジア・北太平洋をめぐる国際秩序に重要な帰結をもたらしただけでなく、大戦下の悲劇に戦後の悲劇を新たに付け加えた。いわゆるシベリア抑留問題がそれである。本報告書に収録された横手論文がその冒頭で指摘するように、戦後抑留問題は日本人のソ連イメージに深い影響を与えてきただけに、問題を解明する作業は切実な意味をもっている。しかし、戦後抑留問題の解明、またそれと密接不可分なスターリン時代のグラウグ(強制収容所)にまつわる問題の解明は、長期にわたりきわめて困難な状況によって妨げられてきた。まして、日本とロシアの研究者がこの問題で討議をかわすというようなことは、想像だにできなかったのである。状況を大きく変えたのは、ソビエト体制の崩壊にともなうソビエト期ロシア史の全面的見直しと従来極秘だった文書館資料へのアクセス可能性の拡大という1990年代に入ってからの新動向である。これによって、近年のロシアでは、アルヒーフ資料の発掘に基づいた抑留問題の解明が着実に進められるようになり、2000年には『ソ連における軍事捕虜』と題する資料集の刊行がはじまった。また、1997年にイルクーツクとキエフで出版されたこの問題に関する本格的な研究書が2000年と2001年には日本語に翻訳、出版された。

スラブ研究センターが上記のセミナーを組織したのは、このような近年めざましい研究動向を踏まえた研究報告の場であることを意識してのことであった。パネリストの構成は、『シベリアの日本人捕虜たち』(イルクーツク、1997年、日本語版、2000年)の著者として知られるセルゲイ・クズネツォーフ(敬称略、以下同じ)、ソ連外交史を専門とする横手慎二、スターリン時代のソ連史・ロシア極東史を専門とする寺山恭輔、上記クズネツォーフの著作を含む抑留の研究書2冊を翻訳した在野の研究者、長勢了治、モンゴルにおける日本人抑留者を研究テーマとするモンゴルからの留学生、オイドフ・バトバヤルである。

S.I.クズネツォーフ、S.V.カラセフ連名の論文は、「満州国」の皇帝溥儀と政府高官、関東軍将官らの抑留に関して、溥儀の著名な自伝『わが半生』などからは窺い知れない部分も含めて事実関係を明らかにしている。本報告書では、この論文に翻訳を付した。翻訳原稿はオイドフ・バトバヤルが作成し、センターの原暉之が手を加えた。

横手慎二の論文は、ソ連政府による日本人抑留の目的、抑留者送還政策に焦点をあてる。ここではロシアの文書館資料とアメリカのGHQ /SCAP資料に日本人抑留体験者の回想・手記を比較検討に立脚した論の展開が行われている。

寺山恭輪の研究動向紹介は、ロシアの文書館資料へのアクセスが比較的容易になった1990年代初頭以後、ロシアの大学等に提出された捕虜問題を扱った数件の学位論文を概観・紹介し、論点を浮き彫りにしている。ここでの検討の対象は第二次大戦下のドイツ兵捕虜をめぐる問題が中心であるが、この問題は日ソ戦争にともなう戦撃日本人抑留についての検討を行うさい、不可欠のテーマである。

長勢了治のコメントは、抑留問題研究の現段階を簡潔に整理している。

オイドフ・バトバヤルの補論は、モンゴルの旧内務省文書館の資料をも利用して1945年10月から2年間モンゴルのラーゲリに収容されていた1万2千人といわれる日本人捕虜たちに光を当てている。

その前身が発足して以来、半世紀近い歴史を刻んできたスラブ研究センターは、その長い研究活動の歩みにおいて、必ずしも戦後抑留問題を無視してきたのではなかった。しかし、この問題を正面から取り上げたのは、おそらく今回が最初である。抑留問題でセミナーを組織するについては、島根県立大学の招聘で来日したS.I.クズネツォーフ・イルクーツク大学教授のセンター訪問が一つの機縁となった。同教授の札幌滞在に便宜をはかっていた島根県立大学の関係者および本学文学研究科の加藤博文助教授にこの場を借りて感謝の意を表したい。

2002年3月22日

北海道大学スラブ研究センター
原暉之